

ロンドンの「カリビアン」カーニバル

ー「ノスタルジア・カーニバルクラブ」が直面した問題性を中心としてー

木 村 葉 子

1. はじめに

ロンドンのノッティングヒル・カーニバルは2日間で約百万人の観客を動員し、9300万ポンド（約200億円）の経済効果をもたらすとされる英国最大規模の祝祭である。色鮮やかな仮装パレード、現代音楽が響きわたるサウンド・システムのステージ、カリブ料理の露店、カーニバル特有の無礼講は、伝統的で静かな英国のイメージの対極にあるカリブの世界である。40年の歴史を持つこのカーニバルの主演となるのは「ウエスト・インディアン¹」とよばれるアフリカ系カリブ人で、英国における最初の有色移民として、様々は差別や反目を経験した。

1976年の大暴動をはじめとして、このカーニバルは英国の政治問題に発展したことから、アブナー・コーエンの研究（1993）を中心に「政治文化運動」として位置づけられた。1990年代以降、祝祭要素をとりこみ、観客層が多様化したため、カーニバルの様相は大きく変化した。しかし現在でもこのカーニバルに対しての政治的圧力は大きく、その存続はつねに危ぶまれている。

本稿ではノッティングヒル・カーニバルの歴史を概観し、「ノスタルジア・カーニバルクラブ」が直面した現代の政治問題を提起する。2005年8月にロンドンで行った重点的なフィールド調査²を中心として、2006年8月の調査も加えて問題性を明らかにする。「ノスタルジア・カーニバルクラブ」という一つの草の根組織を通して、ロンドンで「カリビアン」カーニバルが行なわれることの意味を問い、「カリビアン」とは何か、またなぜ「ノッティングヒル」でなければならないのかを、ホスト社会である英国との対照性から考察する。

2. ノッティングヒル・カーニバルの歴史

アブナー・コーエン（1993）によると、カーニバルの始まりは地域のフリー・スクールのリーダーであったローン・ラズレットがパレードや文化行事でノッティングヒルに住む文化的に多様な人々が交流する構想を1966年に持ったことによる。当時ノッティングヒルのスラム地区では売春、麻薬、マフィア、過激派などに関わるあらゆる犯罪が横行し、すさんだ地域の活性化を図るための計画であった。第一回は英国で伝統的に行なわれているフェアのリバイバルで、地元住民が参加する歴史的な衣装のパレードのほか映画や演劇などが一週間にわたって開催された。初期の頃は人種をこえた地元の小さな祭りであったが、60年代の後半には白人主導のイベントとウェスト・インディアンのカーニバル文化との二極化した構造になり始めた。1970年に麻薬の強制捜査に抗議したウェスト・インディアンのデモ隊が警察と衝突して暴動がおきたことをきっかけにラズレットがリーダーを降板し、白人のカーニバルへの参加が一挙に減退した。

1973年にトリニダード出身のレズリー・パーマーがカーニバル組織のリーダーになり、カーニバルを変革させた。故国で「国民的行事」として伝統的に行われているトリニダード・カーニバルをロンドンで再現し、現在の「カリビアン」カーニバルの原型はこの時代に形成された。1975年にジャマイカ系の若者がカーニバルにレゲエのサウンド・システムをもちこみ、ロンドンのカーニバルは新たな展開をみせた。レゲエが導入されたことにより、カーニバルの観客数は爆発的に増えた³。その多くはロンドンに生まれ育ち、人種差別による不満の捌け口をレゲエに求める、社会的に順応できないウェスト・インディアンの若者であった。

こうした若者に危惧の念をいだき、40人だった警備の警官が1976年のカーニバルでは一挙に1500人に増員された。警官が若者に高圧的に接したことから、若者が暴力や投石で応酬し、百人以上の警察官が負傷し、一般人もまきこむ大暴動に発展した。ノッティングヒル・カーニバルは英国の重要な政治的問題となり、悪名高いカーニバルとして形容されるようになった。その後数年間もカーニバルの終わりに小さな暴動や事件が起こり、カーニバルをやめさせるか、公園かスタジアムという広い場所に移すことが検討された。その解決策として1978年から81年

にかけてフィンズベリー・パークにおいてノッティングヒル・カーニバルと同じ日の同時刻に、「ウエスト・インディアン・カーニバル」がもたれたが成功せず、ウエスト・インディアンのリーダーは、あくまでも「ノッティングヒル」でのカーニバルに固執した。

1980年代になると、カーニバルの実行組織はそれまでの過激な集団に平行して英国内務省、警察、地方自治体が連合して結成され、過激な組織は静かに周辺においやられた。80年代になると、カーニバルはウエスト・インディアンのアイデンティティを形成する一方で、行政の介入によりカーニバルを広く一般にアピールし、カーニバルの様相が変化した (COHEN 1993: 10-78)。

1990年代になると、カーニバルは商業化して発展し、英国の有名企業が協賛することで、ウエスト・インディアン以外の人々も安心感を与えた。カーニバルはまずヨーロッパを中心に、海外のメディアから高い評価と支持をうけたことから英国でも注目されるようになった。2000年には観客数が2日間で200万人、そのうち3分の2以上が白人、2割が海外からの観光客というカーニバルに変容した。

カーニバルが絶頂期を迎えていたとき、2000年のカーニバルで殺人事件がおきたことを取りあげて、マスコミは過去の悪循環をもちだした。ケンジントン・チェルシー区、大ロンドン市議会、ロンドン警察、交通局など行政が一体となり、2003年に新しい実行組織⁴が設立された。カーニバルは安全至上主義になり、高級住宅地化したノッティングヒルの住民からのカーニバルに対する苦情への対応を強化した。さらに有名企業が撤退したため、カーニバルの雰囲気は変わり、観客数も経済効果も半減したといわれる。

2005年には地元住民の要望によりカーニバル・ルートがハイドパークを起点とすることがロンドン市長により発表されたが、ウエスト・インディアンが組織を結成して行政と対峙し、「ノッティングヒル」のカーニバル・ルートを維持した。市長をはじめとする行政側はルートの変更ができなかったことから、カーニバル当日にハイドパークで「カリビアン・ショーケース」というイベントを開催することになった。この行事のために仮装パレードに参加する集団マスバンドやスティールバンドの財政援助となる筈であった資金が使用され、多くのバンドが財政難に苦しむことになった。多額の資金が投入された「カリビアン・ショーケース」に

は行政の思惑どおりの人は集まらなかった一方、「ノッティングヒル」でのカーニバルは2005年7月のテロ事件以降初めて多くの人を集め、ロンドンの回復力を示す「平和なカーニバル」と報道された。

3. 「ノスタルジア・カーニバルクラブ」が直面した問題性

3-1 「ノスタルジア・カーニバルクラブ」の歴史

「ノスタルジア・カーニバルクラブ」はマスバンド⁵やスティールバンド⁶の中でも最も古い歴史をもち、確固たる地位を築いている。ここでその歴史を概観してみたい。第1回のノッティングヒル・カーニバルでは、トリニダード出身のラッセル・ヘンダーソンが率いるスティールバンドの奏でるスティールパンの音色に多くの西インド諸島からの移民が郷愁（ノスタルジア）を感じて集まった。このバンドは1964年に結成され、毎週日曜日アールズ・コートにあるパブで演奏をしていた。のちに「ノスタルジア・スティールバンド」と改名し、ラッセル・ヘンダーソンが会長になり、スターリン・ベタンコートがリーダーとなった。1969年にマスバンド部門と統合し、「ノスタルジア・カーニバルクラブ」となる。このバンドの特徴はスティールパンをひもで首からかけて（pan-around-the-neck）、歩きながら演奏することである。こうしたトリニダードの伝統を持つスティールバンドは、ロンドンでは「ノスタルジア・カーニバルクラブ」だけである。

「ノスタルジア・カーニバルクラブ」はスティールバンドのパイオニア的存在で、英国やヨーロッパにおけるスティールバンドの普及に貢献してきた。その第一人者がこのバンドのリーダーであるスターリン・ベタンコートである。スターリンは1951年、選抜されたグループである「トリニダード・オール・スティール・パーカッション・オーケストラ⁷」の一員として、トリニダードから英国に派遣された。大半のメンバーはトリニダードに帰ったが、スターリンは英国に残り、「抵抗の音楽」とされていたスティールバンドの音楽を、教会、学校、大学、コンサートホールなど、あらゆる場所、あらゆる機会を用いて広め、王室行事にまで発展させた。英国におけるスティールバンド普及の功績により、英国の王室から「大英国勲章」を授与され、「王立芸術協会会員」という称号をもっている。

「ノスタルジア・カーニバルクラブ」では、毎週火曜日と木曜日の午後9時頃から練習が行われる。場所はノッティングヒルを東西に横断する高架道路ウエストウェイの高架下である。練習はスティールパンを支える棒で固定して行われる。スティールパンにはメロディをひくテナー・パンをはじめ、ベース・パン、ギター・パンや伴奏専門のデュダップなどがある。スターリンは生徒一人一人の横に立ち、手本を示しながら楽譜を使わずにスティールパンの弾き方を伝授する。スターリンは「ノスタルジア・カーニバルクラブ」だけでなく、英国全土、ヨーロッパ各地、中近東までスティールパンを広めている。とりわけスイスはスティールバンド運動がさかんで、現在150余のスティールバンドがあるといわれる。

「ノスタルジア・カーニバルクラブ」はノッティングヒル・カーニバル、マンチェスター、バーミンガムなどのカーニバル、400年の伝統を持つサマーセット州のブリッジウォーター・カーニバルや各地で行われるギグとよばれる演奏会で活動している。海外ではスイスのベルン、ドイツのドルトムント、フランスのパリのカーニバルにも参加する。ノッティングヒル・カーニバルには、スイスやドイツからもスティールパン演奏家が集まり、普段の練習時のメンバーの倍以上の大きさに膨らむ。

ノッティングヒル・カーニバルでは日曜日と月曜日にカーニバル・ルートを演奏しながらパレードし、カーニバル前夜にはスティールバンドのメイン・イベントである「パノラマ」とよばれるコンテストにも参加する。カーニバル前日の土曜日にはこの他にノッティングヒルにあるセント・メアリー・オブ・エンジェル・カトリック教会で恒例の演奏会が催される。教会前の道路で演奏が始まると、スティールパンのやさしいノスタルジックな音色に惹かれ、教会や近所の人たちが大勢集まり、音楽に合わせて通りのあちらこちらで踊りが始まる。第1回のノッティングヒル・カーニバルでラッセル・ヘンダーソン率いるスティールバンドの音色に西インド諸島からの移民が次々と通りに出てきたのと同じような光景である。「ノスタルジア・カーニバルクラブ」はこの教会で演奏するために結成されたのであった。

3-2 「ノスタルジア・カーニバルクラブ」の構成員

「ノスタルジア・カーニバルクラブ」はどのような人達で構成されているか、2005年のフィールドワークをもとに記してみたい。ノッティングヒル・カーニバルの仮装パレードに参加する大半のマスバンドは、組織の中心メンバーである第一集団と組織の中核ではないが定期的にかかわりを持つ第二集団、カーニバルだけに参加する第三集団に分類される。「ノスタルジア・カーニバルクラブ」の第一集団で、運営に関わる委員会のメンバーは表1に示すとおりである。

表1. 「ノスタルジア・カーニバルクラブ」の委員会メンバー（第一集団）

名 前	性・年	「エスニシティ」 ⁸	住んでいる区	交通手段 ⁹	所要時間	職業
バンドリーダー（Leader）						
スターリン	男 70	トリニダード 1 世				パン演奏家
委員長（Chairman / Director）						
ハルーン	男 50	トリニダード 1 世	ブレント	車	30 分	大学教授
団長（Captain）						
ライネル	男 50	ガイアナ 2 世	ハックニー	車	1時間10分	大学助教授
事務局（Secretary）						
アドリアーナ	女 40	コロンビア出身	ワンズワース	車	45 分	音楽教師
顧問（Advisors）						
ザヒア	女 40	クウェート出身	ブレント	車	30 分	大学教授
ラウル	男 40	コロンビア出身	ワンズワース	車	45 分	音楽教師

＜下線のついた4人は2005年8月23日に行ったアンケート調査、他は聞き取り調査により作成＞

このマスバンドの委員会メンバーのうち、スターリンを除いて最も長く関わっているのがライネルである。ライネルは音楽家としての経歴が長く、英国のスティールバンド運動の発展に寄与した人である。ハルーンはトリニダードで幼少の頃からスティールパンを演奏していたが、1985年クウェート滞在中に中近東を巡回ツアーに来ていたスターリンと知り合い、後にクラブのメンバーとなった。この第一集団の中でハルーンとザヒア、ラウルとアドリアーナに婚姻関係がみられる。

第二集団は中核メンバーではないが、スティールバンド・プレーヤーとして「ノスタルジア・カーニバルクラブ」に一年を通して練習やイベントに参加して

継続的に関わる人達である。(表2) 第一集団と第二集団のメンバーは、居住地は離れているが、カーニバルやイベントなどで一年を通して親交をもち、「ノスタルジア・ファミリー」を形成している。その他のメンバーには、昔スティールバンドを共に演奏した仲間や友人関係を通してクラブに属する人達も含まれ、これを第三集団とする。(表3)

表2 第二集団として「ノスタルジア・カーニバルクラブ」に属するメンバー

名 前	性・年	「エスニシティ」	住んでいる区	交通手段	所要時間	職 業
イヴァン	男 20	ラテン系混合	ハリンゲイ	車	1 時間	学生
エミーニア	女 30	セルビア	バーネット	地下鉄	1 時間	大学研究者
カーク	男 50	ガイアナ 1 世	ケント州	車	1 時間30分	音楽教師
グレゴリー	男 50	ドミニカ 1 世	ウォルサム	車・バス	2 時間	通信機関士
チャールズ	男 20	セントルシア 1 世	ブレント	地下鉄	20 分	学生
ビアトリス	女 30	アフリカ系 3 世	ニューハム	車	3 時間	学生
マービン	男 20	ジャマイカ 1 世	ケンジントン	バス	15 分	補助教師

<第二集団の 8 人は2005年 8 月23日に行ったアンケート調査をもとに作成>

表3 第三集団として「ノスタルジア・カーニバルクラブ」に属するメンバー

名 前	性・年	「エスニシティ」	住んでいる区	交通手段	所要時間	職 業
アンナ	女 20	ウクライナ出身	ブレント	車	30 分	住込手伝い
ガス	男 50	トリニダード 1 世	エンフィールド	車	45 分	配管工
ジョン	男 50	トリニダード 1 世	ハリンゲイ	車	1 時間	塗装工
ナイマ	女 30	アルジェリア出身	イズリントン	地下鉄	1 時間	音楽家
ナディア	女 20	リビア他 8 種混合	ブレント	地下鉄	40 分	音楽療法士
フランコ	男 40	ジャマイカ系中国人	ハマーミス	車	20 分	写真家
マーシア	女 20	ジャマイカ 1 世	ハリンゲイ	車	45 分	失業中

<下線のついた 3 人は2005年 8 月のアンケート調査、他は聞き取り調査をもとに作成>

第三集団にはノッティングヒル・カーニバルに参加するドイツやスイスからのスティールパン・プレーヤーも含まれる。こうして膨らんだマスバンド「ノスタルジア・カーニバルクラブ」は、ウエスト・インディアンが中心的な役割をもつものの、「エスニシティ」が多岐にわたる、きわめてコスモポリタンな集団である。

3-3. 「ノスタルジア・カーニバルクラブ」が直面した問題

2005年、行政当局はカーニバル・ルートが変更できなかったのも、ハイドパークで「カリビアン・ショーケース」をカーニバルと同時刻に開催することになった。それに対してノッティングヒル・マスバンド連合では一致団結してカーニバル・ルートを守り、行政中心の催しである「カリビアン・ショーケース」はカーニバルとは全く別物で、どのマスバンドもこの催しに一切協力をしないことを申し合わせた。

行政当局はノッティングヒルの住民の不満や苦情に対応し、かつノッティングヒル・カーニバルの経済効果も見逃せないことから「カリビアン」なイベントではあるが、行政が主体となるイベントを計画した。そのため行政当局は、ウェスト・インディアンの中でも英国社会で受け入れられている著名な人物の参加で、「カリビアン」な催しであることをアピールしようとした。

その代表的人物が、スティールバンド運動の第一人者で、「大英国勲章」を授与され、「王立芸術協会会員」という称号を持つスターリンであった。「ノスタルジア・カーニバルクラブ」のメンバーによる再三の懇願にも関わらず、スターリンは行政の圧力に負けて、最終的に「カリビアン・ショーケース」に参加することを承諾した。問題はスターリンだけでなく、「ノスタルジア・カーニバルクラブ」も「カリビアン・ショーケース」に参加するというのが、『ソカ・ニュース』という小さな雑誌の8月号に掲載されてしまったことである。この雑誌は一般の人が入手する機会はほとんどないが、カーニバル関係者にとっては最も重要な情報源である。

団長のライネルが『ソカ・ニュース』の記事に気がついたのが、カーニバル一週間前の日曜日であった。マスバンドである「ノスタルジア・カーニバルクラブ」が「カリビアン・ショーケース」に参加することは、マスバンド連合で団結して決めたことに反するものである。マスバンドのメンバーは、ノッティングヒルのカーニバル・ルートを守ることに疑いをもっていなかったのも、意思に反して政治的に「ノスタルジア・カーニバルクラブ」の名前が使われ、カーニバル愛好者に「裏切り行為」と思われることに衝撃をうけた。

「ノスタルジア・カーニバルクラブ」の創始者であり、最初からのリーダーで

あるスターリンは英国を代表するスティールパンの演奏家であるが、素朴で飾り気のないあたたかい人柄である。メンバーがこよなく愛し、尊敬するスターリンが行政の思惑どおりに「カリビアン・ショーケース」に参加することを承諾させられたことや「ノスタルジア・カーニバルクラブ」の名前までもが「カリビアン・ショーケース」の宣伝に使われたことに対して怒りと落胆を感じたのであった。

カーニバル直前の火曜日、ライネルは練習前にメンバーを集めて『ソカ・ニュース』の記事のこと、スターリンが「カリビアン・ショーケース」に参加すること、マスバンドとして「ノスタルジア・カーニバルクラブ」は断じてショーケースに参加しないことを伝えた。白熱した論争が1時間あまり続き、カーニバル前の練習に意気込んで集まった30人近くのメンバーのうち、半数あまりが怒って帰途についた¹⁰。残ったメンバーは、この問題をとおしてさらに団結した。

二日後の木曜日にスターリンも来て事情を説明し、「カリビアン・ショーケース」には、「ノスタルジア・カーニバルクラブ」ではなく、スターリンが最近指導している3人の若いスイス人女性グループ「エンジェルズ」と出演することと、「カリビアン・ショーケース」が終わった後、ノッティングヒル・カーニバルの仮装パレードに「ノスタルジア・カーニバルクラブ」の一員として参加することを伝えた。ロンドン市長室からは、伝統ある「ノスタルジア・カーニバルクラブ」が「カリビアン・ショーケース」に参加するようにカーニバルの前日まで何度も電話による要請があったが、断固としてマスバンド連合の一員としての姿勢をくずさなかった。

例年ならば、アーツ・カウンシルからマスバンドやスティールバンドに資金援助される筈であった8万ポンド（約1700万円）がカーニバル・ルート拡大のために市長に支払われたため、ほとんどのマスバンドは資金援助を受けられず、財政問題を大きく抱えたカーニバルとなった。そのカーニバルは約百万人という大勢の観客を集め、同時多発テロの後のロンドンとしては大成功の数字を残した。

あるカーニバルのリーダーは、ノッティングヒル・カーニバルは9300万ポンド（約200億円）の経済効果を生み出すが、カーニバル全体に支給される金額は30万ポンド（約6600万円）で不均衡が生じていることを指摘する。とくに2005年は「カリビアン・ショーケース」に潤沢な資金が投入されたことへの不満は大きい。

その矛先は行政だけでなく、英国で大きな業績をもつ「カリビアン」のアーティストにも向けられる。お金の問題が人びとの猜疑心をあおり、「カリビアン」を分断し、「カリビアン」としての忠誠心か、お金をとるかの選択をせまられた。

「ノスタルジア・カーニバルクラブ」は「カリビアン」としての忠誠心を選択したことから財政難におちいることになった¹¹。財政面の問題、スターリンとの関係を今後どのように維持させるかという問題、『ソカ・ニュース』に掲載された誤謬をどのように正すのかという課題に直面したのである。

4. なぜ「ノッティングヒル」なのか

「ノスタルジア・カーニバルクラブ」と同じように、ほとんどのマスバンドは、財政的に逼迫した中でカーニバルを挙行了た。なぜウエスト・インディアンの人達は、かたくなまでに「ノッティングヒル」でのカーニバルにこだわるのであろうか。現在のノッティングヒルはロンドンのトレンドィ・スポットであり、高級住宅地であるが、1960年代のノッティングヒルの光景は全く異なっていた。

「ノスタルジア・カーニバルクラブ」の委員長で、現在はロンドン大学教授であるハルーンは、1960年代の初期、大学進学でトリニダードから初めてロンドンに来た時、ノッティングヒルのスラム地区がロンドンで一番家賃が安く、ウエスト・インディアンが住むことができる数少ない地域であったので、ノッティングヒルで学生生活を送った。当時、ロンドンのどこに行っても「ノー・ブラック（黒人おことわり）」の貼紙がドアに掲げてあり、期待をもって英国に渡ったウエスト・インディアン¹²は大きな失望を味わったという。

そのスラム地区のほとんどの家はポーランド生まれのユダヤ人、ラックマンが所有していた。ラックマンは行き場のない移民を受け入れる一方で、それを利用して、彼らを狭いところにおしこめながらも法外な家賃を請求し、家賃が払えないとなると暴力を行使しても家賃をとりたてた。ラックマンによるスラムの住人に対する搾取は、「ラックマニズム」という言葉を生み出したほど、すさまじいものであったようだ。

家主ラックマンに対する住宅問題はウエスト・インディアンだけでなく、アイ

ルランドをはじめとするヨーロッパからの移民や白人労働者にとっても深刻なものであった。この問題を行政に訴えるために、住民が一体となって組織を作り、これがのちにノッティングヒル・カーニバルの実行組織の基盤となった。ラックマンは悪名高い人物であるが、同時にラックマンがいなければウエスト・インディアンは住む場所もなく、ノッティングビルでカーニバルが開催されることもなかった。過酷な日常生活を強いられたウエスト・インディアンにとってカーニバルは日常生活を反転させる、なくてはならない装置であった。

全体組織のリーダーをはじめ、マスバンドや黒人運動の活動で活躍したマイケル・ラ・ローズ氏¹³によると、ノッティングヒルは、英国におけるブラックパワー・ムーヴメントの中心地でもあったようだ。アメリカやトリニダードをはじめとするカリブ海諸国から影響をうけたブラック・パワー運動の活動拠点がノッティングヒルのラドブローク・グローブにあった。この南北にまっすぐにのびるこの通りは、現在、ノッティングヒル・カーニバルの中心地で、カーニバルのパワーが炸裂する地である。

1980年代にカーニバル組織の実行委員長であったアレックス・パスカル氏は、「カーニバルは、我々の遺産であり、文化的アイデンティティであり、英国にはこれに匹敵するものがない。カーニバルがなければ我々が何者かわからなくなってしまう (COHEN 1993: 49)」とカーニバルの重要性を説いた。ノッティングヒル・カーニバルはウエスト・インディアンが自分達の文化を英国社会に提示する一年で最も大切な機会である。

ノッティングヒルのスラム地域活性化のために生まれたカーニバルは、ウエストウェイの建設でスラム地区が一掃され、高級住宅地に移り変わると、皮肉にも地域住民から排除されるようなカーニバルになった。1976年の大暴動のあと、フィンズベリー・パークで「カリビアン・カーニバル」が創設され、ウエスト・インディアンの若者をノッティングヒル・カーニバルに行かせないようにしたのと同じように、現代でも他の地域で同じようなイベントをつくってカーニバルに行かせない試みが持たれた。

ロンドンの行政当局は、「カリビアン・ショーケース」という名で、「ブリティッシュ」なイベントを創設し、カーニバルのヘゲモニーを変容させようとした。そ

のもくろみに必死に抵抗して「ノッティングヒル」を守り続けることがウエスト・インディアンのアイデンティティを維持することであった。ノッティングヒル・カーニバルが、「ノッティングヒル」の閑静な住宅地の生活道路で行われなくなるとき、ウエスト・インディアンの「アイデンティティ」は崩壊してしまうのである。

5. おわりに

2006年のノッティングヒル・カーニバルは2005年よりさらに多くの観客を集め、事件もなく平和なカーニバルであった。「ノスタルジア・カーニバルクラブ」にスターリン・ベタンコートの姿はなかった。かわりにトリニダード出身のペドロ・バージェスが指導者として迎え入れられ、いつものように練習が重ねられた。スターリンがプロのスティールパン演奏家として英国社会に貢献したのに対して、ペドロは1964年に移民としてロンドンにわたり、アマチュアとして3つのスティールバンドの設立に貢献し、多くのバンドで指導的な立場にあった。

ペドロがトリニダードから英国に移民した1960年代とは異なり、現代ではウエスト・インディアンに対する表面的な人種差別は法的に禁じられているし、彼らが社会問題になることもない。しかし多くのカーニバル従事者が指摘するように、今でもウエスト・インディアンが生み出す芸術に対して文化的な偏見（バイアス）が存在し、バレエやオペラといった芸術には高い評価が与えられる一方で、カーニバルの芸術に対する評価は低い。

あるカーニバル・リーダーは、ウエスト・インディアン主導の「カリビアン」カーニバルは徐々に財政破綻し、組織内部から消滅することが期待されているのだという。そのかわりに経済効果が大きいノッティングヒル・カーニバルを「カリビアン・ショーケース」のような行政が操作する「ブリテッシュネス¹⁵」が基調にあるイベントへと巧妙に移行させられるのではないかと懸念する。ウエスト・インディアンの社会に「ひび」を入れた「カリビアン・ショーケース」の問題は、新聞にもテレビにもどこにも報道されなかった。

- 1 コロンブスが新大陸を発見したときインド（東インド）と誤認したため、カリブ海の島嶼が西インド諸島（ウエスト・インディーズ）、そこに住む人々が「ウエスト・インディアン」とよばれるようになった。本稿では、1948年のウインドラッシュ号の来航以降に英国に移民した西インド諸島出身者とその子孫である第二、第三、第四世代を「ウエスト・インディアン」とする。彼らは西アフリカから大西洋奴隷貿易でカリブ海の砂糖農園に売られた奴隷の末裔でもあり、こうした奴隷や移民としての苦闘の歴史が、カーニバルの根幹をなしている。
- 2 筆者の修士論文（木村2006）では、ノッティングヒル・カーニバルを都市の祝祭として分析した。その調査方法としては、和崎（1996）が都市祭礼の研究方法で提唱する「広さ」と多様性から都市社会を析出する方法と「深さ」と関係系から都市社会を析出する方法に準ずるものである（和崎 1996: 538-552）。「ノスタルジア・カーニバルクラブ」の調査は後者の方法によって行われたものである。本稿は修士論文第6章マスバンドの事例研究Ⅱ「ノスタルジア・カーニバルクラブ」に加筆修正したものである。
- 3 1973年にはノッティングヒル・カーニバルの観客数が3000人から5万人に、74年には10万人、75年には25万人となった。
- 4 ノッティングヒル・カーニバル全体の実行組織およびリーダーの変遷、カーニバルの名称の変化については、木村（2005）で明らかにした。
- 5 マスバンドは仮装パレードに参加する集団で、ノッティングヒル・マスバンド連盟には70のマスバンドが登録されている。その大半がウエスト・インディアン中心のカリビアン・マスバンドで、仮装パレードのために毎年仮装コスチュームを考案し、製作し、ストリート・パフォーマンスとして演出し、カーニバルに参加する集団である。マスバンドについては筆者の修士論文（木村2006）で詳述した。
- 6 スティールバンドを構成する楽器スティールパンは、1930年代トリニダードの工場からでる 廃物をひろってカーニバルでやかましく打ち鳴らしたことから始まった。1940年代になりドラム缶を調律することで旋律が奏でられ、楽器となった。スティールパンの音楽は、演奏者（パンマン）が首都ポート・オブ・スペインのスラム地区出身で、娼婦に貢がせながら演奏活動を行っていたものも少なくなかったことから、「騒音」として社会的汚名が着せられていた（鈴木2002: 117-118）。ロンドンでも初期の時代は貧しい移民の音楽で、都市の密集した住宅地で夜遅くまでスティールパンを練習することはしばしば社会問題化していた。
- 7 「トリニダード・オール・スティール・パーカッション・オーケストラ（TASPO）」が英国で大好評を博したことから、それまで社会的に認められていなかったスティールパン音楽がトリニダードの民衆にも受容されるようになり、その後スティールパンは国民的楽器として愛好されるようになった。英国においてもTASPOのスティールバンド運

動に果たした役割は大きい。2006年は、TASPOが英国にスティールパン音楽を導入して55周年になるのを記念して、「ノスタルジア・カーニバルクラブ」、英国スティールバンド連盟、アーツ・カウンシルが中心になって第1回のスティールパン・ヨーロッパ国際会議が8月30日、31日に開催された。筆者は日本におけるスティールバンドの展開に関して、"The Steelband Perspective in Japan and the Far East" と題して発表した。国際会議参加にあたっては、大和日英基金の奨励助成をうけた。

- 8 ここにおける「エスニシティ」とは、メンバーの出身国あるいは民族集団を表わす。2世、3世の場合は1世や2世の文化を自分のアイデンティティのよりどころにするもののロンドンなど英国で生まれ育った人達を表わす。
- 9 交通手段や所要時間については、メンバーの居住地からスティールパンの練習場（パンヤード）までの時間と移動手段を示した。
- 10 2005年8月23日火曜日は「ノスタルジア・カーニバルクラブ」にとって運命の日であったが、以前から計画されていた筆者のアンケート調査に対して、「ノスタルジア・カーニバルクラブ」に愛着をもって残った全員が快く引き受けてくださった。ここに感謝の意を表したい。
- 11 このマスバンドでは毎年約5000ポンド（約110万円）の金額がバンドの維持、衣装代、楽器の調弦、パーティ代などに使われてきた。2005年はアーツ・カウンシルから援助を受けることができなかったため、大きな赤字を抱えることになった。このことを知った篤志家の女性が小切手で2000ポンド（約44万円）の寄付をした。
- 12 1948年のウインドラッシュ号をはじめとして、移民船から集団で降りてくるウェスト・インディアンの写真を見ると、帽子をかぶりスーツにネクタイという正装で、新天地への生活に希望をもつ様子がうかがえるが「色の障壁（Color bar）」とよばれる皮膚の色の差別により、黒人は白人と同等の権利を有することができなかった（SEWELL 1998）。
- 13 マイケル・ラ・ローズ氏とのインタビューは2006年8月31日に行われた。ラ・ローズ氏は、トリニダードで生まれ、現在黒人問題に関する専門書店「ニュー・ビーコン・ブックス」の経営者であり、長年のカーニバルの実行組織や黒人運動での経験から文筆家や研究者でもある。コーエン（1993）によると1980年代にサウンド・システムをトレーラーに搭載して移動式にするという画期的な発明に尽力した中心人物でもある（COHEN 1993:118）。
- 14 ペドロ・バージェス氏は1964年に英国に移住し、多くの西インド諸島移民を同じように地下鉄の車掌をするかたわら、「ブルーノーツ・スティールバンド」を設立した。ドイツやロシアへも演奏旅行にでかけた。1970年よりACAS（勸告調停仲裁委員会）に勤務し、「メトロノーム・スティール・オーケストラ」、「グリッサンド・スティール・オーケストラ」の設立に寄与した。現在は退職して「ノスタルジア・カーニバルクラブ」などでチューナーとして指導にあたっている。チューナーとはスティールパンを作り製作し、

調整し、演奏できる高度な専門家である。ロンドンのスティールバンドでは数少ないチューナーの中から良いチューナーを見つけることがバンドの存続の大きな位置をしめる。

- 15 塩路 (2003) は「ブリティッシュネス」および「イングリッシュネス」の人類学的研究に言及している。「ブリティッシュネス」は英国内の多くのエスニック・コミュニティやエスニック・アイデンティティが含まれる。1970年以降スコットランドやウェールズが独自の文化圏としての主張し、スコットランド議会がうまれた一方で、インド・アフリカ・カリブ諸国からの移民の権利やアイデンティティの問題が浮上した。こうした状況のなかで、英国のマジョリティであり、政治的・文化的中心であるイングランドは強く自らのアイデンティティを主張できず、文化的な「ナショナリズム」への希求をつのらせ、1980年代以降ヘリテージ・ブームなど「イングリッシュネス」が創造されてきた(塩路 2003: 12-19)。このような観点からすると、ノッティングヒル・カーニバルは「イングリッシュネス」を基調とするカーニバルに変えられようとしている。

<参考文献>

英文文献

COHEN, Abner

- 1993 *Masquerade Politics: Explorations in the Structure of Urban Cultural Movements*. Berkeley / Los Angeles: University of California Press.

SEWELL, Tony

- 1998 *Keep on Moving: The Windrush Legacy: The Black Experience in Britain from 1948*. London: Voice Enterprises Ltd.

英文資料

- 2005 *Soca News Magazine August 2005*

和文文献

木村 葉子

- 2005 「ノッティングヒル・カーニバルーロンドンのカリビアン・ストリート・フェスティバルー」『ヨーロッパ基層文化研究』vol. 1. pp. 59-74. ヨーロッパ基層文化研究会
- 2006 『ノッティングヒル・カーニバルの社会人類学的研究ー都市祝祭の集団組織「マスパンド」に焦点をあててー』(名古屋大学大学院文学研究科 修士論文)

塩路 有子

- 2003 『英国カントリーサイドの民族誌ーイングリッシュネスの創造と文化遺産』(阪南大学叢書 66) 明石書店

鈴木 慎一郎

2002 「カリブ海の英語圏とオランダ語圏－トリニダード・トバゴ、ジャマイカ、グレナダ、モンセラート、アンティーガ、バルバドス、ドミニカ、スリナム、さまざまな祝祭のなかから－」『カリブ・ラテンアメリカ音の地図』東琢磨編, 音楽之友社

和崎 春日

1996 『大文字の都市人類学的研究－左大文字を中心として－』刀水書房

(きむら ようこ 比較人文学)